



1981・冬・第6号

うごめ本り緊出り思
Agora

アゴラ

鶴見大学図書館報



目 次

吾唯知足.....	有岡 章.....	1
思い出深い本のこと.....	江湖山恒明.....	2— 3
座談会<図書館を考える>.....		4— 9
歯学文献の探し方.....		10—11
図書館だより・図書館の展示・編集後記.....		12

吾唯知足

図書館事務長 有岡 章

館報アゴラ6号発刊にあたり、新年の御挨拶を申しあげます。図書館にとりまして、これから3月末まで、すなわち新学年度が始まるまでの間、種々の予定があります。それは学年末の試験が終り、皆さんが休暇に入りますと、図書館は閉館となり、蔵書の総点検、配置換え、修理修繕、統計・整理整頓、一年分の大掃除等々普段には出来ない仕事が増え、たくさんあり、新年度開館への準備ということになるわけです。直接利用者とは疎縁となりますが、そういうわけで必要な、大切な期間でもあるわけです。話しは少しかわりますが、昨年の蔵書点検の結果で亡失図書が多い

のに驚ろき、又今年度は切り取り図書が多発したこと等、残念なことが多かった一年でした。今春予定している蔵書点検も、何かいやな予感がいたします。

図書館の資料を盗んではいけない、切り取ってはいけない、書き込みをしてはいけないということ、どのようにして教えるのか、教えたら徹底してもらえるのか、利用相談や参考相談などより、はるかに難題であります。最も易しいはずのことが、最も大切なことが、何故そんなに難しく、厄介でなければならないのか不思議でなりません。

思い出深い本のこと

文学部教授 江湖山 恒 明

(一) 狂言記

私の卒業論文は「狂言記における待遇法」という題でした。

周知のとおり、能狂言には大蔵・鷲・和泉の流派があり、各流とも狂言の台本（正本）を秘蔵していますが、それらは無名の学生であった私には、うかがい得ない世界の秘宝でした。

そこで、読み物とする意識をもってまとめられた、それだけに何流ともつかぬ物になった『狂言記』をテキストに取上げる事にしました。これは、例えば繰返しやその他の冗長な箇所除去などが、主要な特徴になっていると言えるでしょう。

これとても、今から半世紀前の事とて、名著文庫本・国民文庫本・有朋堂文庫本・日本文学大系本ぐらいいでした。ところが、運よく神田の古本屋で嘉永版の木版本を入手する事ができましたが、そのへんが限度で、それを資料にして論文を書かなければなるまいと覚悟していたら、指導教授の橋本進吉博士が、所持しておられた元禄版の『絵入狂言記』を貸して下さいました。

思いがけない幸運に、天にも昇る思いで、それを大事に抱え、群馬県の法師温泉へ直行しました。当時の法師温泉は全くの山里で、後閑からバスに揺られて着いてみると、宿屋が長寿館一軒しかなく、電燈も点いておらず、広大な浴槽につかっていると、狐や熊がノッソリ入って来るんじゃないかと思われる所でした。そのかわり、人情は極めて篤く、宿の人たちみんなに親切にしてもらいました。

「昼はひねもす、夜は夜もすがら」と言いたいところですが、それほど勤勉ではなかったものの、昼夜心を静めて校合に努めまし

た。夜などランプの明りで仕事を進めていると、江戸時代へ時間のフィルムを逆さ巻きにしたような錯覚さえ起しました。

また、昼間仕事に疲れると、谷川沿いに流れを溯って行き、人っ子一人いない川っぶちの岩に腰をおろし、まわりのたたずまいや雲の流れなどをぼんやり眺めて時を過していると、ファイトが湧いてきました。

女中さんの話では、こうした鄙びた趣をめでて、菊池寛をはじめ、有名な作家たちが作品をまとめるために来るという事でしたが、成程と感じました。

ただ、昼間は勿論、夜寝る時も、橋本先生の元禄版だけは命よりも大事にし、肌身離さずという言葉がぴったりするほど、手許から瞬時も離しませんでした。

それだけに、校合を終え、本郷浅嘉町のお宅へ元禄版をお返しして、もう一度法師温泉へトンボがえりした時は、安心のため、クタクタに疲れていました。

(二) 古言別音鈔

本居宣長が発見し、石塚龍磨・八木美穂・草鹿砥宣隆が継承発展させ、橋本進吉博士が大成させた研究分野に、現在「上代特殊仮名遣」と呼ばれる物があります。これは、例えば『箱』の「コ」と、『心』の「コ」とが、上代では違う種類の万葉仮名で書分けられているが、当時は別の音韻（『箱』は「KO」、『心』は「KÖ」、即ち、前者は後舌母音、後者は中舌母音の付いた物）であったからだろうとされている物です。

その研究書の一つに『古言別音鈔』がありますが、その一本を静岡県磐田市の大久保家が所蔵しておられます。ここは昔風に言うと東海道五十三次の中の見付の宿で、日本最古

と言われる小学校の隣りにありますし、先祖の忠尚翁は幕末維新の際、遠州報国隊を結成して、勤皇のために活躍した人です。

右の事実を、小山正博士の著書によって知ったので、一面識もないのに手紙でお願いしたら、快諾してもらいました。打合せた日時に伺うと、それまで文通だけしていた小山博士が、今日の事を大久保家から聞かれた由で、既に見えていました。

『古言別音鈔』を見ると、忠尚翁の書いた識語から、忠尚翁が、この書物の著者であり同時に最も親しい兄弟弟子（兩人とも美穂の弟子）であった宣隆から借りた「草稿本」を書写した物という事が分かりましたし、その前に京都大学で浜田敦教授に見せてもらった京都大学本に比べ、いろいろな点で違いのある事も分かりました。

書物を見せてもらった後、賀茂真淵その他の遠江国学者の軸物も見せてもらいましたが、私は雄渾な真淵の書が好きなので、いい目の保養になり、大久保家のさりげない御厚意に頭の下る思いでした。

その時、「多くの卒業生でしょうから、一々覚えていらっしゃるでしょうね」と言われ、「他学科なら特別の事が無い限り分かりませんが、国文科なら25名ですから、大抵分ります。何でしょうか」という問いを巡って、次のような応答が続きました。

「うちの嫁もお茶の水の国文科ですが」「（私はハッと気がつき）恵子さんでしょうか」「そうです」「私は恵子さんたちのクラス担任でしたし、卒業論文も上代文学だったので、上代語の事を時々質問されたりして、よく覚えています。実は、結婚式には論文指導の次田真幸先生と一緒に招かれて出席したんですが、新婦側の出席者だったので、御挨拶もせず退去したため、気がつきませんでした。それにしても、うっかりしていて大変失礼しました（と、謝ると）」「そうでしたか。こちらこそ、気がつきませんで」。

同席の小山博士も「奇縁ですね」と感心された事でした。

なお、同書は一昨年、大久保恵子さんの「解説」付きで活字になりました。

（三）「大平翁御手記」の写

『大平翁御手記』は享和元年8月25日から10月2日までの記録で、宣長の病氣・死去・葬儀が詳述されています。書写者として「親久」と署名がありますが、親久は出羽平鹿郡八沢木村、保呂羽山神社の神官大友家に生れ、宣長の最晩年に入門、文化2年松坂で歿した人で、その遺品の中にあったのが「『大平翁御手記』の写」だそうです。

その存在を世に紹介したのは村岡典嗣博士で、大友家の諒解を得て、岩波書店版『本居宣長全集 第十三冊』の付録「月報 第五号」に発表されました。その中でも「十月朔日」の条に「今日伊射和富山貞平入門、是は兼て入門願有之候所、段々延引居候所、今日に至り入門也。但し父貞豪は素より門人也。御棺を披き亡骸を拝ましむ。物哀れ也」の記述で、貞平が宣長歿後の門人として入門した劇的な出来事が、簡潔に表現されているのが印象的ですし、「一般には知られない宣長伝の貴重な資料」と村岡博士は述べています。

ところで、村岡博士はこれを「本全集の別冊中には改めて収めるが」とことわっているのですが、敗戦でこの全集の出版が中止されたため、「別冊」は遂に刊行されませんでした。もし、この「月報（昭和19年6月）」での紹介が無かったら、この物の存在は、相当長い未来に亘って、多くの人には知られなかったのではないかと思います。こう思うと、本との出逢いの偶然とか因縁とかいう事を痛感させられます。なお、親子二代に亘って宣長の弟子になった富山家は大黒屋という豪商で、当時、桂本・金沢本・藍紙本・天治本と並ぶ平安時代の古写本『元暦校本万葉集』を所蔵していた事で有名です。

座談会

図書館を考える

文学部・日本文学科 大屋 幸世助教授
 〃・一般教育 武田元次郎助教授
 歯学部・臨床 渡辺 義男教授
 〃・〃 花村 典之教授
 短大部・国文科 露木 悟義教授

短大部・保育科 芹沢 勇教授
 〃・保健科 宮入 秀夫教授
 〃・一般教育 三沢ゆたか講師
 図書館・中村初雄館長・有岡章事務長(司会)
 (飯島・海野・吉田・蓮見)

<図書館の想いあれこれ>

司会：お忙しいところ、お集まり頂きましてありがとうございます。創刊号で、“図書館を考える”と題しまして、学生との座談会をやっており、その延長線上で、再度異なる視点から、図書館を見つめ直したいという事で、この座談会を企画いたしました。先生方の忌憚のない意見の中から、将来の図書館の方向づけへのヒントが頂けたら、と思っております。

それではまず、各先生方の持っておられる図書館観・あるいは印象に残った図書館というようなものがあれば、ぜひご紹介頂きたいと思うんですが、そんな事を含めて花村先生から順にお願いします。

花村：私は正直言って、うちの学校の図書館をあんまり利用しておりませんので、この学校に対しての印象はないんですが、ただ、東京医科歯科大学、東京歯科大学と理研等を、よく利用させてもらいました。医科歯科大学は新しくなってからは、まあ利用し易いと言えば、利用し易いんですけども、昔のきたない時の方が何となく親しみと言うか、書庫の中に入ってこう“俺は本に埋まって勉強している”っていう感じはとってもして、懐しいですね。そういう懐しい思い出と、またその逆に図書館と言うと、何とも陰鬱な、前にも書かして頂き

ましたけれども、コトリと音がすると、皆、ビクッとしなければいけないという嫌らしさ、という事等があったため、どうしても懐しさに相反するイメージもあるんです。まあ、具体的な事を申し上げられなくて、申し訳ないんですが。

渡辺：私自身は、わりあい図書館を利用したと思っております。特に学位论文の研究をやっていた頃は、医科歯科にありまして、当時戦争直後の頃でしたから、勿論他に本はありませんし、結局は書庫の内へ入りまして、片端から、色んな文献を漁りました。いま花村先生がおっしゃったように、当時非常に薄暗い所で、それこそ裸電球のような所で利用して、却ってそれが私自身には大いに参考になって、あーあの辺の書架にはどういう本があるなという事は、大体医科歯科に居た頃は知っておりました。

いまは大変便利になりましたが、終戦、昭和20年前後は、勿論複写機なんていうものはありませんので、そこへ行ってノートに写して帰ったと、そういうような事で随分苦労しましたが、本当に図書館を利用したな、という気持ちが痛切にありました。いまは何か一枚伝票書けば、どこの図書館にあるものも数日後には複写物が送ってこられる、という時代ですから、まあ相当勉強出来るはずだと思うんですが、その割に若い人達は利用もしていないし、沢山集めて

いるけれども、実際読んでいるかというのは分らないですね。

現在はまあ病院長なんかやっておりますと、勉強するチャンスありませんので時々利用させて頂く位ですが、やはり、私は人頼みというのは嫌いなものですから、直接自分で行っております。ただやっぱり、しょっちゅう使う本というのは、手元に置いときたいものですから、自分で求めるなり、あるいは長期貸出のような形で周りに本を置いとく、というような事をやっております。

露木：自分の経験とか、自分の事をあんまり人前で話す事は、経験がないものですから一寸恥ずかしい気がするんですけども。

卒業論文の時は、まだ国会図書館が出来た前でしたので、上野の図書館に、それこそ7月・8月の夏休み、丁度その頃卒業論文は、9月の10日提出だったものですから文字通り、3食上野の図書館でお世話になりました。食事の事も心配しないで勉強に打ち込んだというのは、自分にとっては非常に思い出になっています。本学では開架式であるって事がとてもいい事ですね。最初の印象は全部、とにかく貴重なものであっても開架してあったので驚き、やはり女子大だなーというふうに、その時は思ったんですけども。



宮入：私も医科歯科を出ておりますので医科

歯科の図書館、特に焼け残りの非常に学校のまだ不備な時代には家族的な親しみがあがり、やはり本を借りて読んだ記憶では一番暖かい感じがして懐しいですね。その他の記憶では、学位論文をやっておりましたころ、たまたま慶応の医学部の図書館へ一寸紹介されてまいりました。そうしたところが、まあ建物も非常に恰好の大きさで、しかも落ち着いた雰囲気の中で木立の中にあるという事で、図書館というものがこんないい雰囲気があるものかなと思いました。そしてまた、図書を借りようとしたしたら、どうぞ勝手に出して読んでくれて言うんですね。まあ同じ図書館でもこんなに雰囲気の自由なところもあるのかなという事で、医科歯科と比べた訳じゃないですけども、大変に私も感激しました。将来私ももう本が必要でなくなった時は、こういう所に本を寄付しようかなと思った位です。

三沢：外国の図書館で印象に残っておりますのは、パリの国立図書館とか、コレージュ・ド・フランスの附属図書館とかで、図書館の人が親切にしてくださったというのが、一番の思い出として残っております。それからアゴラを読ませて頂きまして、ビデオカセットテープのところが、とってもうれしかったと思います。

大屋：私は、まあ何よりも“本好き”でありますし、また研究しているのが日本の近代文学という事から、図書館とは学生時代からのずーっと深い付合でありまして、あちらこちらの図書館を見ておきますと、そこで問題にされることは全部うちの図書館、まあ、規模は違いますけれど、鶴見の図書館の問題と重なっているように思えます。例えば早稲田の図書館では何とか空間を作るため、雑誌類を横積みにして、書架に並べるようになってしまいました。図書館の本は永遠に増えていく訳であって、その意味でその本を容れる器をどうするかという

のは、まさに鶴見の図書館のこれからの問題としてあると思います。

それから次によく利用するのは国会図書館ですが、10数年間利用していて一番思うのは、なるべくならば行かないで済ましたいということです。それはなぜかといいますと、行っても請求票を出して本が出てくるまでに、50分はかかるわけです。それはまあ、利用者の増大という現象だろうと思う訳ですね。これは器の問題にも係わるんですけれども、現在の鶴見の図書館でも、学生達が十分に図書館を利用したらとてもあの座席では足りないし、ロッカーも足りない。そうすると、これが本当に利用されたら、利用者数の増大にどう応じたらいいのか、将来は学生が1日2日待たなければならぬんじゃないか、という問題も孕んでいるわけですね。次によく行くところは日本近代文学館ですが、一冊しかないというような貴重な資料が、コピーにかけられて押されて破壊されるという事を、今、防ぎようがないわけです。これはまったく鶴見の問題、特に開架式という鶴見で一番いいところであると同時に、資料保存という面では誠に無残な面がありますね。盗難にも会ったり、学生が本を裸のままで持って出て行く、と文字通り手垢で散々汚れてしまうという状況。将来は貴重な資料になるかも知れない本が、破損のため改装され原型を失ってしまうということもあります。そういう資料保存という面と利用という面を、どうバランスを取らせたらいいのかという問題ですね。この三件が、僕のよく利用する図書館で抱えている問題でして、それはそのまま小さい図書館であっても、鶴見にもあるんだなと思うんです。

武田：私、わりあい図書館の本を借りるという経験は、早かったような気もするんです。戦後ですが、出身の高校に一応専任の司書の方がいらっしゃいまして、独立の建

物があったりして時々入りましたし、たまたま住んでおりました沓掛に公立の図書館がありまして、わりあい自由に貸してもらえていうことで、まあ歩いて20分位のところですからよく利用しましたし、大学時代はそれほど利用した事もなかったんですが、図書館を勉強した時は、慶応の図書館学資料室が揃っているという事でよく利用させて頂きました。あとは、大学の職員として長く勤めていましたので内側からという、システムとしては非常に使い勝手がいいわけなんですけれども、大屋先生もおっしゃいましたように色々管理上問題があるわけでした。授業の関係で、どうしても参考業務の演習という事で参考図書を色々学生に使わせるわけなんですけれども、辞典類なんかは丈夫で痛むはずなのに破損が激しくて、非常に心苦しく思うわけです。



司会：中村先生、館長という立場でなく文学部教授としていかがでしょう。

中村：私が図書館を使い出したのは小学4年の時からで、成城小学校が実験学校というのでしょうか、一週間のうち、5時間とか、6時間ずつの自由読書の時間というのが与えられており、小学校としては贅沢な図書室もありまして、楽しくて、楽しくて色々な物を漁った思い出があります。そのあけく担任の先生から、お前の読み方は現

実から逃避の悪い読み方だ、と注意されたこともありまして。その後は普通の理解での読み方になりまして、ドイツに行きました。参考図書室では自分で探しながら読みましたが、個々の専攻書などは閉架式ですので、探すなんていっても大変でした。しかし、著者・書名を正確に知らなくても、何でも知っているデーターを3つ・4つ出して、図書館員に探してもらっていました。時によっては一週間後に来てくれということを言われたりですが、とにかく探してもらえました。アメリカ式の図書館サービスという形はそうではなく、自分でもってどんどん探せる。オープンというのが良いのだと先程お話がありましたが、オープンでもって探せるという事もありました。本当はそれをもう少し索引を使ったりなんかすると、その書棚にあるだけでなく、その何倍もある情報に接する事ができるんだということも考えますと、案外ドイツ式の図書館経営もいいんだという見方も出来ますね。

芹沢：記憶に残っているのは、やっぱり出身大学の図書館です。震災で、ロックフェラー財団の寄付による図書館でしたが、建物ばかりでなく、設備が個席になっているんですね。非常に落ちついているんです。暗ければランプを自分だけつけて、あの当時では珍しかった。この図書館はお世話になって10年以上になるんですが、当時から比べますと、非常に充実してきたなという感じなんです。私共は専門の本は買いますけれども、関連する本は出来るだけ図書館で利用させてもらうという事になります。実はこの間、総合雑誌で戦後の事をどうしても調べたかったのです。たまたま、ここにアサヒジャーナルが創刊号から全部揃っているんで全巻検索する事ができ、かなり色んな事をノート出来ました。資料を充実

して、いまのように東京まで行かなくてもこの図書館で間に合うというのも、一つの特徴と言えるんじゃないかと思いました。

<図書館はどうあるべきか>

司会：それでは、本学の図書館に焦点を絞り、各科の抱える問題点に触れながら、具体的に図書館をどうしたら良いか、どうあるべきか、というようなことのお考えをお聞かせ頂きたいのですが、芹沢先生、いかがでしょう。

芹沢：私は保育科に関係ある者ですが、利用率の統計で見ますと非常に低いんですね。それは考えてみれば、2つの理由があると思うんです。一つは実技系統の科目が非常に多い事ですね。これは本に頼ったら、むしろマイナスになるという一面と、本を読む為の時間的な余裕が極めて少ないという事なんです。単位がたった2カ年間で山程あって多い。余裕なんて、全然ない。そういう事が一つあると思います。あと一つは今の世代の学生生活をする人にとって、文字と言葉が分離してしまったんじゃないかと思いますね。文字を使わなくてもコミュニケーション出来る事が余りにも多過ぎるんで、なかなか図書館が遠い。むしろ保育科から言うと、図書を中心にしましてですね、例えば児童文化のような性格を持ってもらう事、よく図書館を文化センター式のものに考える事があるようですが、そういった色彩を今後考えてもらえる事が、保育科の学生にとってはあるいはプラスになるのではないか、という事を考えております。

司会：歯学部の方では、いかがでしょうか。

花村：私は保育科の場合と同じだと思いますが、いま皆本を買わな過ぎる。確かに本は高いんですけども、歯学部の本一冊平均12,000円位ですか、でもそれが飯の種にな

るんですから、図書館で本を読むというのは一寸おかしいんじゃないかと思うんですけれどもね。年々買わないんじゃないかと思います。女子学生の場合は例えば、これが参考図書だと言いますと、売店を通して大体100冊位出たんですね。いまは参考図書なんて言ったら出ないです。全然。そんなような事で、私は図書館以前に本を買ってはいいという気持を持っているんです。

司会：本を読んでもらいたい、というのと同じ意味ではあるんですね。文学部の場合はどうでしょうか。

大屋：先程、どなたか言われていましたが、最近の鶴見の図書館は、随分充実してきたと僕も強く思います。しかし学生がうちには相当本があるんだぞー。雑誌があるんだぞーという事を、そのわりに認識していませんね。特に雑誌に関してはわざわざ県立図書館とか、国会図書館に見に行っているんです。と言うのは開架式ですからね。目に見えないと無いということになってしまいう。鶴見の図書館が相当充実して来ているということを認識させ、できるだけ大学を利用させるという事が必要ですね。それとこのアンケートを見ますと、カードを相当引いている事になっているんですが、僕が図書館に行っても、学生がカードを引いているのを見たのは、あまりないですね。カードを見て検索するというくせをもっとつけて欲しいですね。そうすれば、思いがけないところに配架されている本を見つけ出すこともできます。

司会：保健科はいかがでしょう。

宮入：やっぱり保健科も、保育科と大体同じような事が言えるのではないのでしょうか。とにかく、これだけ養護と歯科衛生のカリキュラムがぎっしりつまっていますと、やっぱり物理的に、時間的に、なかなか図書館を利用するという余裕がないんですね。それと同時にやっぱり我々教師側の方も

う少し、私自身の反省ですけれども、図書館でどういう本をどういうふうに見て勉強して行きなさいという指示をもう一寸与える方がいいですね。もう一つ私が考えますのはその図書だけを利用するのではなく、例えば、少しくつろぐ為、少し自分の頭を冷静にしたり、休めたりする場所というような使い方があっていいと思いますね。



司会：国文科の場合はどうでしょうか。

露木：教師として、自分が利用するという図書館ではないと僕は思っているんです。まだ本学ではそういう設備がないと思うんですね。これは総合大学と言っても学部が少なく、隣接分野のものが無いものですからね。そういう意味で本学の図書館は学生のためのものだ、僕は認識している訳です。だから積極的に利用させるようにはしていますし、まあ複本等を多く買って頂いてはいます。そういう教科の勉強の為の図書館として、今国文科なんかはほとんど利用しているわけですね。一つしかないものですから、色々な機能を一つの中に納めているので難しい問題があるのだと思います。教科の為の勉強とかそういう図書館、つまり参考室なら参考室が別にある、今度は静かに本を読む部屋が別にあるというような事が必要だと思いますね。これはやっぱり図書館が建たなければしょうがない

という事になります、それが全てではないと思っています。いま学校で自発的に勉強する習慣というのが、本学の学生は非常に少ないわけですね。図書館の利用はもっぱら貸出か、教科の勉強のためではないかと思っていますがね。そういう意味では、まだ図書館は、ほんの小部分の機能しか果たしていないのではないかと思います。

＜新しい図書館に何を望むか＞

司会：図書館を利用する上での問題点や、各科の学生が置かれている状況をお話頂きましたが、それではそういう現状をふまえ、仮に図書館を作るという事になりましたら、新しい図書館に何を望むかということ伺いたいのですが。

三沢：今日は英文科の先生がおいでになっていませんが、やっぱり視聴覚資料の充実という事が望まれるんじゃないでしょうか。

露木：卒業生なんかも利用できるようにね。大きければいいって言うんじゃないと言えますけど、やっぱりなるべく大きく、広いものが望ましいと思うんですけれども。それと視聴覚設備は絶対備えなければいけない問題だと思います。いつ建つか分りませんがそういうビジョンというんでしょうか、そういうものは色々討論したり、討議したりして作り上げていく事が、必要じゃないかと思うんです。それを是非やってほしいと思うんですけど。どっから出てくるかわからないけれども、設計図がぱっと出てすぐ建つって言うんじゃないか具合が悪いと思うんですよ。

大屋：先程宮入先生からお話があった、図書館におけるブラウジングというのですか、そういうものを設けてもいいのではないかなと思います。そういう所に雑誌なんかを置いて心を和ませるような空間を、新しい図書館を作るならば設けてもいいんじゃない

いかなという気がします。もう一点は現在の開架式というものを考え直していかないと、このままでは本の盗難・破損等が、研究の大きな阻害条件になってくると思うんですね。そこをはっきり考えて図書館が充実している今、一部を閉架にするという事を考えてほしい、その二点を今のところ思っておりますけれど。

中村：先程三沢・露木両先生がおっしゃった視聴覚資料の件ですが、設備を充実している、図書館にこのようなものがあるんだといったようなことをもっとお知らせして、お互いに使えるようにしていきたいものです。それから大屋先生のおっしゃった、複本や何か沢山ある時に目的に合った保管を考えるということは、非常にいい事だと思います。それをどういうふうにするかというところの1・2年で解決できる問題ではありません。せっかくこの前学長先生から、図書館のための委員会を発足させようという話があったことです。もう少し長いビジョンを持って、適切に進むようなことができればと思っております。

司会：本日はありがとうございました。

本誌創刊号と、この号の二度に亘る座談会によって、利用者である学生、教員の皆様から、図書館に対するお話を伺うことができました。

ブラウジングや視聴覚資料室の設置等、新図書館の建築を待たなければ、解決できない点も多くあるようですが、それだけではなく、演習用の複本の問題、各種目録の検索法、資料の保管方法等、現状においても解決可能な点もあり、今後改善に向けて努力していきたいと思います。

なお、誌面の都合上、割愛させて頂いた部分があり、おわび申し上げます。

歯学文献の探し方

当館に所蔵する歯学領域における文献探索のための抄録誌・索引誌には、主に次のものがあります。

- i) Dental Abstracts (1956～)
- ii) Index to Dental Literature [以下 I. D. L. と略す] (1923～)
- iii) Oral Research Abstracts (1966～1978)
- iv) Oral Science Reviews (1972～1977)
- v) 医学中央雑誌・歯学版 (1966～)
- vi) 歯科学文献集 (1977～)

〔 () 内は創刊年及び廃刊年、但し収録期間は多少異なります〕

今回は、この中で最も網羅性の高い、I. D. L. による文献検索について説明します。

(1) I. D. L. の基本事項

(a) I. D. L. とは：1923年に Index to the Periodical Dental Literature という誌名で創刊され、以後、American Dental Association (A. D. A.) より、I. D. L. として引き続き刊行されています。

当初、収録されたのは英語の文献だけでしたが、1963年より英語以外の文献も収録されるようになりました。1965年からは、アメリカ国立医学図書館 (National Library of Medicine: N. L. M.) の機械検索システムである MEDLARS (Medical Literature Analysis and Retrieval System) のデータベースを使って編集されています。

I. D. L. に収録される記事は、雑誌に掲載されている原著論文・会議録・論説・総説・展望などです。ブックレビューやリプリント等は収録されません。

(b) 発行形態：I. D. L. は年に4回発行され、そのたびに前の号を累積してゆくので、最新の号を検索すれば前の号は検索する必要はありません。そして、その年の最後に発行される第4号が、年間累積版となります。

(c) 収録の対象となる雑誌の数及び収録される論文の数：1979年版では、世界各国の医・歯学領域の雑誌・1,452誌を収載し13,950の論文を収録しています。

(d) 使用されている言語：英語。他国語は英訳されて収録されます。

(e) 雑誌論文が収録されるまでの月数：数ヶ月から一年以上。

(f) 索引の種類：主題索引と著者索引

(2) I. D. L. の構成

(a) 歯学図書リスト：その年に受け入れた歯学領域の図書が、著者のアルファベット順に配列されています。

(b) 学位論文リスト：歯科大学の学位論文が著者のアルファベット順に配列されています。

(c) 雑誌リスト：収録された論文の掲載誌リスト。検索した論文では、雑誌名は略記されているので、このリストにより完全な誌名を確認します。

(d) 見出し語のリスト：主題索引で使われている歯学関係の見出し語が、アルファベット順に配列されています。

(e) 総説・展望記事のリスト：総説・展望記事 (Reviews) のみが著者のアルファベット順に配列されています。このセクションは、本体からピックアップしたものですから両方で検索可能です。

(f) 索引部：I. D. L. に収録された論文の主題索引、著者索引です。検索の際は、この部分を使用します。

(3) I. D. L. での検索の実際

(a) 主題索引での検索：例えば、薬物依存 (Drug Dependence) という見出し語で検

索すると3点の論文が見つかります。(図1)

DRUG DEPENDENCE

- Dental treatment and drug addiction [letter] McDonald D. Aust Dent J 23(5):433, Oct 78
- Hotline for help. Help is as close as the telephone in this bold new California program. Parness W. Dent Manage 17(9):49-54, Sep 77
- [The danger of indiscriminate use of substances which provoke physical and psychological dependence] Abramowicz M, et al Rev Assoc Paul Cir Dent 32(3):210-5, May-Jun 78 (Eng. Abstr.) (Por)

(図1) I.D.L. 1979年版—Subject Section

最初の論文は、“Australian Dental Journal”の23巻5号への投稿記事です。[letter]と注記があります。誌名は太字になっています。

2番目の論文は、“Dental Management”17巻9号に掲載された英語の原著論文です。論題は、Hotline……programで、著者はParness W.です。3番目の論文は、(Por)と最後に注記されているようにポルトガル語の原著論文です。論題は英訳されて[]で括られています。(Eng. Abstr.)は、論文に英語の抄録が付されていることを、また、(et al)は共著のいることを示しています。“Aust. Dent. J.”は、Index Medicus (MEDALRS)によって編集される、医学・生物学とその関連分野の代表的な索引誌：I. M.)にも収録される雑誌なので、I. M.でも検索できます。(図2)

DRUG DEPENDENCE

- Anesthesia for the alcoholic and addict. Weiss SL. AANA J 47(3):309-12, Jun 79
- The abuse potential of benzodiazepines with special reference to oxazepam. Bliding A. Acta Psychiatr Scand [Suppl] (274):111-6, 1978
- Chemical dependency education within medical schools: supervised clinical experience. Harris IB, et al. Am J Drug Alcohol Abuse 5(1):59-74, 1978
- Alcohol and illicit drug use: follow-up study of treatment admissions to DARP during 1969-1971. Simpson DD, et al. Am J Drug Alcohol Abuse 5(1):1-22, 1978
- The family and drug misuse: a bibliography. Stanton MD. Am J Drug Alcohol Abuse 5(2):151-70, 1978 (370 ref.)
- Self-medication with pseudoephedrine in a chronically depressed patient. Diaz MA, et al. Am J Psychiatry 136(9):1217-8, Sep 79
- Dental treatment and drug addiction [letter] McDonald D. Aust Dent J 23(5):433, Oct 78
- 'Drug addiction' and 'drug dependence': a note on word meanings. Rippere V. Br J Addict 73(4):353-8, Dec 78

(図2) I.M. 1979年版—Subject Index

2番目、3番目の論文は、I. M.に未収録の雑誌に掲載の為、I. M.では検索できません。

(b) 著者索引による検索：(a)で見つかった3

番目の論文の著者で検索してみます。(図3)

- Abramova EI see Mashkilleison AL
- Abramowicz M, Cocicov C: O perigo do uso indiscriminado das substâncias que provocam dependência física ou psíquica Rev Assoc Paul Cir Dent 32(3):210-5, May-Jun 78 (Eng. Abstr.) (Por)
- Abrams AM, Melrose RJ: Acinic cell tumors of minor salivary gland origin. Oral Surg 46(2):220-33, Aug 78

(図3) I.D.L. 1979年版—Name Section

論題は原綴のままになっていて英訳されていません。また、Cocicov C.という共著者がいます。共著者で検索すると、最初の著者へもどるように指示がなされています。(図4)

- Cochran RE, Thomson J: Perioral dermatitis: a reappraisal. Clin Exp Dermatol 4(1):75-80, Mar 79
- Cociani S see Antonione G
- Cocicov C see Abramowicz M
- Cocicov C see Moudcay A

(図4) I.D.L. 1979年版—Name Section

(4) 検索の際の参考資料

● Medical Subject Headings (MeSH)

I. D. L. 及び I. M. 主題検索を行う場合に用いられる見出し語のリストです。

MeSHは、見出し語のアルファベット順に配列されたリスト (Alphabetical List) と、その見出し語を領域的に選別整理して、上位概念及び下位概念の関係がわかるように階層構造に組み換えたリスト (Tree Structures) との2つの部分からなっています。

● MeSH・1978・日本語版

● MeSH・1978・和英版

MeSH・1978年版の Alphabetical List から作成されたものです。Tree Structure の日本語版も刊行される予定です。

● I. D. L. の有効な利用のために・(歯学件名の階層別編成およびその和訳)

“歯科学報”の41巻4号～6号、42巻1号、4号に、大阪歯科大学図書館によって連載されたもので、MeSH・1978年版から歯学関係の見出し語をぬき出して、Tree Structure を作成し和訳をつけています。

以上、I. D. L. の利用法について説明しましたが、I. M. 等他の資料の利用については次の機会に行ってゆく予定です。

図書館だより

◎閉館日のお知らせ

- 1月31日(土) 短大入試準備
- 2月3日(火) 歯学部入試準備
- 2月4日(水)～6日(金) 歯学部入試
- 2月12日(木) 文学部入試準備
- 2月13日(金) 文学部入試
- ※3月2日(月)～11日(水) 蔵書点検期間中
- 3月25日(水) 卒業式
- ※4月1日(水)～7日(火) 館内整理期間中
- 4月8日(水) 入学式

※4月9日(木)～14日(火) オリエンテーション
期間中

※印については歯学部別館は開館

◎春休みの図書館利用

2・3月の開館時間(本館のみ、歯学部別館は従来通り)

平日 9:00～4:50

土曜日 9:00～1:00

2月27日(金)・28日(土)は蔵書点検準備の
為、貸出いたしません。

図書館の展示

来年度は、次のような要領で、所蔵資料
の紹介をかねて展示を行ないます。

- (1) 芥川龍之介の本(4月20日～5月23日)
近年複製技術が進んで、ほとんど実物そ
っくりの本が刊行される。今回は芥川龍
之介の本の複製本を全て陳列する。
- (2) 御伽草子から草双紙へ(6月1日～7
月4日)
室町時代の御伽草子と、それを承けて発
展した近世小説のうち、浮世草子、草双
紙(赤本・黒本・青本、黄表紙、合巻)
の主な作品を展示する。
- (3) 口中抄と錦絵(9月7日～10月9日)

中世から近世へかけて伝えられた歯科
(漢方)の秘伝書(写本)で、山田平太
先生旧蔵書を中心に展示する。

- (4) 児童書の歴史(10月19日～11月20日)
屈指の児童文庫・オズボーン・コレク
ション(トロント公共図書館蔵)の複製
本を中心に児童書(絵本)の歴史をたど
る。
- (5) 源氏物語の本(11月24日～12月26日)
源氏物語の本文にはいくつかの系統が
あり、注釈書もそれにつれて多様にな
る。この両者も含めて研究史的な観点か
ら展示する。

編集後記

一係の手仕事であった閲覧ニュースから、
活字印刷に体裁を整え、館報へ衣更えて
2年経った。これまでも振り返ると、図
書委員の先生をはじめ、多くの皆さんのご
協力をいただいたことが、大きな支えにな
って、ここまでこられたと思っている。

今年度末で本誌編集スタッフが大幅に入
れ替り、次号からは新しい体勢でスタート
する。初心に返って頑張りたい。(飯島)

アゴラ 一鶴見大学図書館報一

1981・冬号(通巻第6号)

昭和56年1月14日発行

発行 鶴見大学図書館

館長 中村初雄

横浜市鶴見区鶴見2-1-3

TEL (045) 581-1001